

# 琉球大学学術リポジトリ

学校の教育体制と地域の支援体制の相互構築の試み  
～「安全なまちづくり」を目指した「学社融合」の  
実践事例～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2008-07-09 キーワード (Ja): 学社融合, 開かれた学校, 生徒指導, 教育相談, 特別支援, 情報連携, 行動連携, 危機管理, 防犯体制 キーワード (En): 作成者: 新垣, 英司, Arakaki, Hideshi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6616">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6616</a>

# 学校の教育体制と地域の支援体制の相互構築の試み

## ～「安全なまちづくり」を目指した「学社融合」の実践事例～

Important considerations concerning the joint development  
of the school educational system and district support programs.

- Actual examples of merged educational

-social systems under the "Building a safe city" program. -

新 垣 英 司

キーワード：学社融合・開かれた学校・生徒指導・教育相談・特別支援・情報連携・行動連携・危機  
管理・防犯体制

### 1. はじめに

言うまでもなく、学校教育においては、子ども達の健やかな成長を願い、様々な教育活動に取り組んでいる。しかし、今日、子ども達を取り巻く環境は必ずしも望ましいものであるとは言い難い。日々様々な問題を抱えた子が学校に登校し、あるいは不登校を繰り返し、学校はその対応に頭を抱えている。子ども達の抱える問題に対応し、その課題解決の支援をするためには、学校経営において組織体制をどのように構築すればよいのか、また学校だけでは困難なケースに対して、関係機関にどのような連携ができるのか、その関係の構築が重要になる。

そこで、学校の組織体制あるいは学校と家庭・地域並びに各関係機関との“連携・協力”のあり方の事例として、論者の勤務する宜野湾市立嘉数小学校を取り上げ、実際に「子ども理解体制」をどのように構築しているのか、また、家庭、地域、各関係機関との連携をどのように進めているのか、以下、その目的や方法について述べていきたい。各学校や関係機関・市民団体における実効性のある取り組みの一つ一つの結果が、全体として“学社融合”を抽象的な概念から具体的な概念へと変換し、その姿・形がより明確なものになると考える。

ちなみに、現在は、“学社連携”から“学社融合<sup>1)</sup>”という言葉が主流になってきている。“連携”か“融合”かという論議もまだまだあるが、言葉の意味としての違いを吟味する作業よりも、その生涯学習体制の構築のあり方について議論した方が、より建設的かつ創造的な作業であると考えられる。

### 2. 嘉数小学校の概要

嘉数小学校<sup>2)</sup>は、沖縄島の北緯26度15分、東経127度44分、標高72mにあり、創立は大正8年4月1日である。敷地面積は16490㎡、職員数は44人、児童数は1029人、学級数は32学級であり、大規模校に位置づけられる。

---

宜野湾市立嘉数小学校

教育の目的は、知・徳・体の調和のとれた人格完成にあり、それを具現化するための学校の役割は、子どもを主体にした、分かる授業の喜びと友や教師との楽しいふれあいに溢れる学校づくりであると捉え、学校教育目標に「進んで学びよく考える子、思いやりがあり、みんなと力を合わせる子、じょうぶな体、強い心を持つ子」、学校経営の理念には、「はじめに子どもありき、子どもがいて学校あり、学校は楽しい所」を掲げている。

### 3. 不登校児童数

ところで、平成18年度の気になる児童数（週3日以上事故欠席と病気欠席の理由が頭痛・腹痛・元気無し・体調不良）の内訳は、毎月の調査データによると、次のようになっている。

- 毎月報告されている児童数（8名）
  - 心因性不登校児童数（2名）
  - 家庭環境による不登校の児童数（5名）
  - 問題行動による不登校の児童数（1名）
- 気になる児童数（46名）
  - 担任からの報告や相談があった児童数（21名）
  - 登校しぶりの児童数（3名）
  - 遅刻の多い（月3回以上）児童数（22名）
  - その他（1名）

以上の調査データからみると、かなりの数の児童が、様々な問題を抱え、学校不適應を起こしていることが伺える。しかし、この数字は、あくまでも毎月の調査で報告のあった分の数字、つまり氷山の一角であり、水面下には言葉のいじめや友達とのトラブル、あるいは家庭での問題を抱えた児童が、かなりいると思わなくてはならない。学校は、本来児童にとって“楽しく学ぶところ”であり、学校に来れば友達がいて先生がいて、自分の居場所があるのが自然の姿である。

そこで、この学校課題に対応するために、

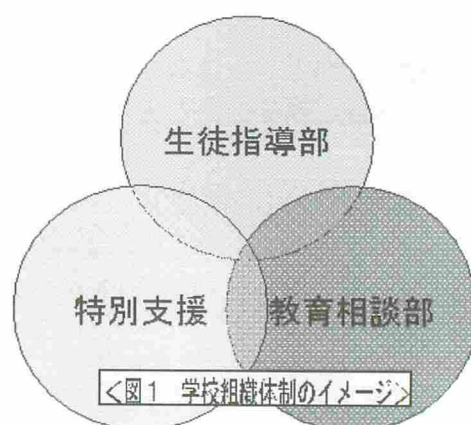
- ① 組織体制の構築
- ② 居場所づくり等の環境整備
- ③ 実態把握のための諸アンケートの実施
- ④ 解決に向けたケース会議の実施
- ⑤ 家庭・地域や関係機関との連携強化

等々の取り組みを進めてきた。

### 4. 校内における組織体制の構築

こうした中で、本校では平成16年度に、校務分掌に特別支援コーディネーターを位置づけ、特別支援体制を構築する取り組みを行った。学級では、LDやADHD等の児童に学級担任一人だけで対応していたため、学級崩壊とまではいかないまでも、担任一人にかなりの負担がかかっていた。また、生徒指導部からの毎月の報告も、数値とA児など、イニシャルでの表示であったため、全職員での共通理解を図るのが困難であった。そこで、学校でどの担任がどんな児童を抱えているのか、全職員で共通理解が図れるように改善していった。そして、その児童への支援計画を作成し、校長・教頭はじめ、空き時間の職員がその学級へ支援に入っていた。

この取り組みは、全職員での体制を構築するために大きな意





義があったが、しかし、いくつかの問題点も含んでいた。それは、空き時間の職員を支援計画のコマに埋めていくと、その職員の学級事務の時間が取れないということ、さらに大きな問題は、低学年の職員が年休等を取ると、補充計画を組まなくてはならないため、支援計画がストップしてしまうということである。このことから、担任以外の職員がどれだけ動けるかが、重要なポイントであることが分かった。そこで、次年度から本部の理科・音楽専科や指導法加配、特殊学級の職員が、学年や学級を支援できるように校務分掌をうめていった。

組織体制としては、気になる児童がどのような問題を抱えているのかを見極めるために、生徒指導部と教育相談部、特別支援部の合同部会を設置した（以下、「子ども理解体制」と呼ぶ）。例えばその話し合いの中で、生徒指導主任が中心になり、「指導支援カルテ」を活用し、怠学・非行型、心因性かあるいは複合型なのか、あるいはLDやADHDの検査が必要なのかを見極め、支援としてはカウンセリングや登校支援、学習支援等、どのような支援が必要なのかを決定していく。また、どの部が対応するか決定し、ケースによっては関係機関との連携を図る。

このように、各部で支援している進捗状況の共通理解を図り、情報共有から行動連携をとという形で、各部が有機的に結びつき機能するようになった。また、これまでの取り組みの結果から、各部から出されるアンケート調査が重複したり、不審者対策や安全管理の面からの安全部との連携も必要になり、次年度からさらに実効性のある活動が可能となるように、機能的な組織体制の再構築について検討中である。

## 5. 基本的生活習慣形成の取り組み

次に、基本的生活習慣形成の取り組みを挙げる。本年度の生徒指導の重点として、規律ある集団生活、けじめある、子どもらしい素直な態度の育成を掲げ、「あいさつの習慣化」、「けじめ正しく時間を守る」、「物を大切にする」、「進んで働く」の四項目に絞り、年間を通して全体的、継続的に指導をしてきた。

その具体的な取り組みとして、以下の事を行った。

- ① 毎月の生活目標・「嘉数っ子の約束」を各教室に掲示し、指導した。また、本年度から、PTA行事カレンダーに「嘉数っ子の約束」や「太陽の家」、「日課表」等を入れ作成し、各家庭に配布し、活用してもらった。
- ② 遅刻ゼロ運動、挨拶運動を実施し、基本的生活習慣の定着を図った。
- ③ 毎月「人権の日」を設定し、各学級で『人権ガイドブック』を活用して、“いじめ”についてアンケートや学級での指導を行った。

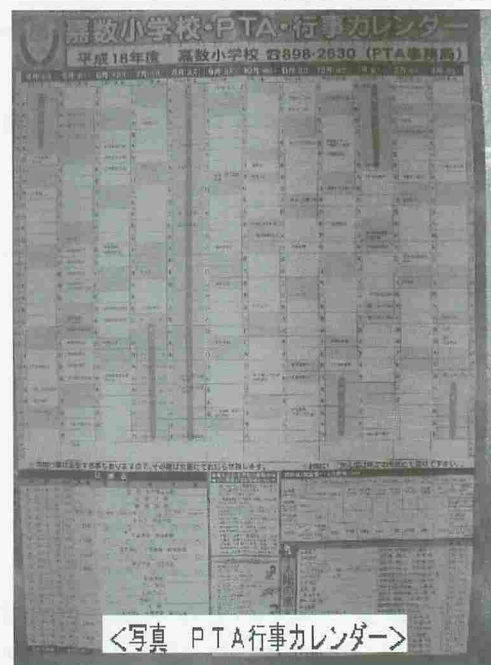
以上の取り組みは、基本的生活習慣の乱れから、怠学や非行型の不登校に至るケースも多いことから、家庭との共通理解や共同体制が必要であり、重要な取り組みであると考えらる。

## 6. 子ども理解体制、気になる児童への対応

本校の課題として、宜野湾市では出席簿と健康観察簿が統合され、学級常備となったため、保健室での出欠状況が確認



＜写真 朝の挨拶運動の様子＞



＜写真 PTA行事カレンダー＞

ができないという問題点があった。そのため、無断欠席児童へのアプローチが後手になってしまうということが、たびたびあった。

そこで、毎日の出欠状況確認の方法として、デジタル学級日誌「ラインズキャンパス<sup>3</sup>」を導入した。これは、学級で、その日の日直の児童が記入する学級日誌をデジタル化したもので、各学級で入力すると、出欠状況の集計から授業時数、その他いろいろな情報が、リアルタイムで学校全体の集計が確認できるというもので、子ども理解体制を構築する上で大変効果があった。

また、次のように、各担任や学年の担当からの「報告・連絡・相談」を徹底するように、共通理解を図った。

#### ① 支援をする為の情報収集と分析

担任が児童一人一人の状況を把握し、気になる児童を報告する。

(指導支援カルテ記入)

- 毎月の調査で気になる児童の報告ファイルを作成した。
- 教育相談については、生徒指導主任が担当の係に連絡する。
- 出欠状況確認のために、ラインズキャンパスを活用した。
- 11月から「人権の日」に「いじめアンケート」を実施し、実態把握に努めた。
- 「心の相談週間」を年2回実施し、児童の心の悩みや相談に対応した。
- 「心の相談アンケート」を実施し、児童の心の悩みや実態把握に努めた。
- 「はーとフルポスト」を設置し、児童の心の悩みや相談に対応した。

#### ② 支援の方法として、担任が、児童及び保護者と担当と顔を合わせる場を設定

- 問題行動については、生徒指導主任に報告・連絡・相談し、学年指導あるいは生徒指導主任が指導した。
- 心に問題を抱えている児童については、教育相談担当が、スクールカウンセラーや「子どもと親の相談員」との面談日程をコーディネートした。本校配属の親と子の相談員以外にも、関係機関との連携として、宜野湾市教育委員会はごろも学習センターの教育相談員やスクールカウンセラー、嘉数中学校のスクールカウンセラーも活用した。
- 学習支援は、担任からの児童の学力情報をもとに、児童の実態に即した学習支援計画を作成し、全職員体制で学習支援を行った。
- 学校での居場所づくりとして、保健室以外に、教育相談室「やすらぎルーム」を全職員で整備した。また、新たに図書室にも居場所となる空間をつくり、学習支



＜写真 PTA行事カレンダー＞



＜写真 ラインズキャンパス画面＞



＜写真 はーとフルポスト＞



＜写真 やすらぎルームの様子＞



援等ができるように整備した。

### ③ 家庭との連携強化

無断欠席児童の家庭には、担任から電話連絡し、欠席理由を確認した。また、不登校児童や登校しぶりの児童へは、担任と一緒に登校支援や家庭訪問を行った。

放課後等の家庭訪問は、その状況に合わせて担任と同行して行い、保護者との顔合わせや児童との関係づくりを行った。



＜写真 やすらぎルームの様子＞

### ④ 関係機関との連携（はごろも学習センター・市役所・コザ児童相談所など）

関係機関との連携については、子どもと親の相談員の活用は当然であるが、主に、不登校児童の対応として、はごろも学習センターの「スクールカウンセラー」と連携し、児童の教育相談を行った。「巡回相談員」が来校してきたときには、1学期の様子について情報交換を行った。

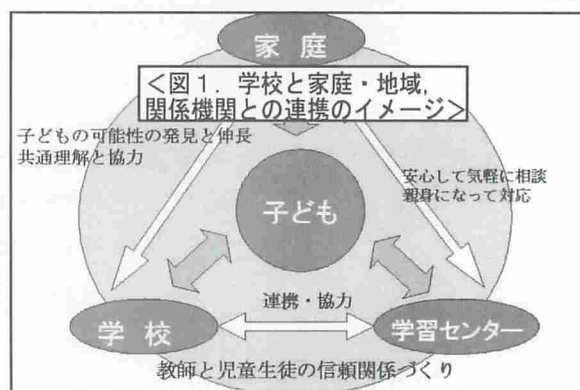
また、家庭状況の情報提供や家庭支援については、市役所の「児童家庭課」や「保護課」と連携を行い、共通認識で対応してきた。さらに、児童虐待やDV関係で保護されたケースに関しては、「コザ児童相談所」や「女性相談所」と連携を図って対応した。さらに、「県立総合教育センター」と連携して、発達検査等を通して、気になる児童の実態把握に努めた。また、兄妹がいるケースに関しては、「中学校」と連携を図って対応策を検討してきた。

その不登校対策の成果として、これまでほとんど登校していなかった児童（3兄弟で、兄、姉とも不登校児童）が、少しずつ登校するようになり、9月からは、一日学校で過ごす日も見られるようになった。また、保護者（母親）も、これまで学校に対する不信感が強く、学校側の取組については協力を拒んでいたが、少しずつ協力する意思が現れてきて、一学期末（7月中旬頃）には、学校まで本人を送ってくるようになった。

不登校対策の課題としては、気になる児童について家庭支援が必要なケースが多く、市役所の家庭相談員の協力を得ているが、民生児童委員との連携をさらに強化していきたい。また、はごろも学習センター教育相談員並びにスクールカウンセラー、子どもと親の相談員、中学校スクールカウンセラー等の力を借りてカウンセリングを進めているが、学習支援にまでは手が回らない現状がある。現在、琉球大学の学生ボランティアや退職教員を活用した学習支援を行っているが限界があり、さらに、不登校児童の学校適応のために、外部人材を活用した学習支援体制の構築が必要である。

相談員・スクールカウンセラー来校予定表 5月				
月	火	水	木	金
1 辺土名淳子先生 8:40～12:40	2	3 憲法記念日	4 国民の休日	5 子どもの日
8 辺土名淳子先生 8:40～12:40	9	10 座間味神楽台先生 9:00～13:00 辺土名淳子先生 8:40～12:40	11	12 辺土名淳子先生 8:40～12:40
15 辺土名淳子先生 8:40～12:40	16	17 辺土名淳子先生 8:40～12:40	18 渡嘉敷あゆみ先生 8:40～12:00	19 辺土名淳子先生 8:40～12:40
22 辺土名淳子先生 8:40～12:40	23	24	25 武田紀美子先生 9:00～13:00	26 辺土名淳子先生 8:40～12:40
29 日曜日				

＜表1. 相談員・スクールカウンセラー来校予定表＞



## 7. 安全な登下校指導の徹底

本校校区は、県道34号線と241号線に挟まれ交通量が多く、また、不審者による声かけ事案も多く発生し、児童の登下校の安全確保についての課題を抱えている。そこで、本校でも危機管理として、

家庭、地域、関係機関と連携して、様々な取組を行っている。  
そこで以下、主な取り組みを紹介したい。

まず、一つ目は、PTA生活指導部や地域・保護者の協力による「朝の交通安全指導」であるが、昨年度からは「下校時の通学路安全パトロール」も実施し、さらに、青色回転灯を宜野湾警察署に申請し、青色回転灯搭載の学校車による、通学路の安全パトロールも実施している。

二つ目は、定期的に実施している安全一斉下校と通学路の安全点検である。全職員と幼稚園、各自治会、地域子ども会、警察も一緒に通学路を点検し、危険箇所等は安全マップに挿入、随時修正して各家庭に配布している。これについては、後の不審者対策の取り組みで詳しく触れたい。

三つ目は、これはほとんどの学校でも実施していると思うが、毎年低学年では、警察官を招いての「交通安全教室」を実施している。

## 8. 不審者対策の取り組み

また、本校の校区は、前述したように不審者による声かけ事案も多く、不審者への対応も学校課題の一つである。以下に、その取り組みについて紹介したい。

### ① 不審者対策避難訓練の実施

本校では、学期毎に避難訓練を実施しているが、一学期は火災避難訓練を実施し、二学期は不審者対策の避難訓練を行う。三学期は地震避難訓練を実施する。実際、昨年は授業中に、学校の近くで刃物をもった押し入り強盗が逃亡するという事件が発生し、学校でも緊急体制をとるということがあった。

そこで、飛行機墜落事故の避難訓練にかえて、不審者対策の避難訓練実施した。

### ② 「太陽の家」の委嘱の取り組み

本校の校区には、警察署指定の「太陽の家」が少なく、児童の、地域での安全確保に課題があった。そこで、学校側から家庭・地域に設置協力を呼びかけ、「太陽の家」の指定を増やしていった。さらに、一斉下校・通学路の安全点検の際に、「太陽の家」の方々に来校して頂いて、児童に紹介し、顔を覚えてもらった。

さらに、新しく「太陽の家」を引き受けてくださった地域の方々を学校にお呼びして、警察から委嘱状を交付してもらって、連絡協議会を開いた。

### ③ 地域の安全点検と地域防犯パトロールの実施

子ども達が安全に健やかに成長していくためには、地域での安全確保が大切であり、「地域の子は地域で守る」という観点から、学校、保護者、関係機関・団体等が一



＜写真 青色回転灯搭載の学校車＞



＜写真 通学路の安全点検の様子＞



＜写真 参加した地域の自治会青年会＞

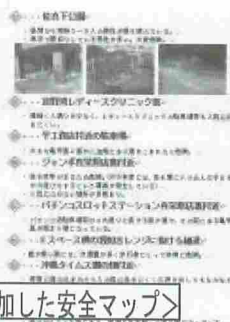
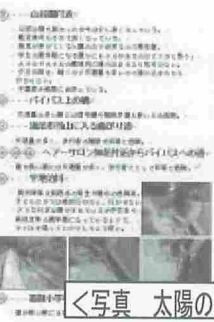
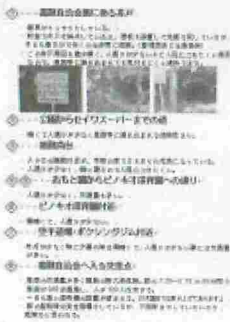
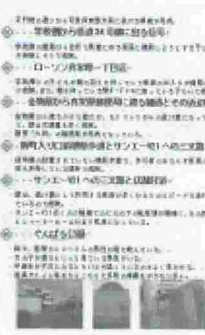
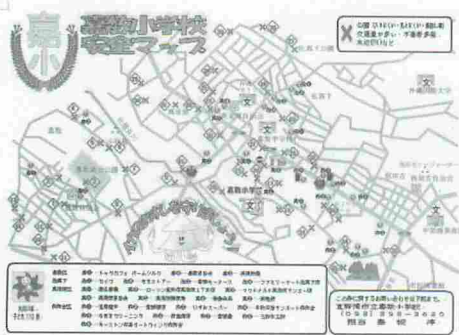


＜写真 朝の交通安全指導の様子＞



＜写真 不審者避難訓練の様子＞





＜写真 太陽の家を追加した安全マップ＞

体となった地域ぐるみの運動を展開し、事件事故の未然防止に努めていく必要がある。

そこで、親子で登下校を実施し、再度登下校路の点検を行い、安全な通学路の利用の徹底を図るとともに、安全パトロールを実施し、地域住民にも知らせ、地域ぐるみの安全・安心なまちづくりの気運の高揚を図ってきた。2回目の安全一斉下校を6学年で実施し、児童一人一人が校区の地図を持ち、安全点検を行った。また、児童や保護者が気になる危険箇所等を記入して提出してもらった資料を元に、安全マップを修正し、再度各家庭に配布した。

また、宜野湾警察署と市で連携し、中学校区を防犯地域に指定してもらい、五つの自治会を中心に、地域での防犯パトロール隊を結成し、その指定書の交付式を行った。これにより、学校が中心となって、地域に協力依頼という形で行ってきた地域安全パトロールが、各自治会の防犯パトロールと連携し、一体となった取組が可能となった。

さらに、昨年からPTAや地域の有志で、PTAジョギング防犯パトロール隊「嘉数やあぐなあ」を結成し、夕方からのジョギングをする際に“防犯”の腕章を着け、地域の安全意識を高めるためのキャンペーンも行ってきた。

#### ④ キュート連絡網の活用

さらに、昨年度から不審者情報や台風災害時の休校のお知らせ等、緊急連絡が可能となる、携帯電話配信システム「キュート連絡網<sup>4</sup>」を導入している。これによって、



＜写真 太陽の家委嘱状交付式＞



＜写真 一斉安全下校の様子＞



＜写真 第一回太陽の家連絡協議会＞





不審者情報等をリアルタイムに保護者や関係機関に配信し、情報提供を行う事が出来るようになった。

このシステムは、生徒指導主任が運用するようにしているが、ソフトを購入し、学校が運用するために、ランニングコストがかからない。また、操作も簡易であり、難しい知識は必要ない。保護者は、嘉数小のホームページからバーコードで登録出来るシステムである。また、保護者や関係機関への携帯電話への配信と同時に、不審者情報はホームページにもアップするようにしている。

#### ⑤ スクールガード結成の取り組み

登下校の安全については前述したような取り組みを行ってきたが、授業中の安全管理については、スクールガードの予算措置がないことから、学校独自でスクールガードを設置する必要性が出てきた。そこで、PTAのボランティア活動を活性化させ、サークル活動を、スクールガードとして活用できるように工夫した。

まず、一つ目は自治会の婦人部にも協力を依頼して、PTA環境整備部に「花植隊」を結成した。ガーデニングの好きなお母さん達は何名か参加し、苗づくりや学校美化に取り組んでいる。また、自治会の老人会にお願いして、幼稚園の園児との交流会を日常的に出来るようにコーディネートを進めている。幼稚園は、小学校と違って保育のカリキュラムが緩やかなため、小学校の授業のように単元や学習内容を気にせずに、外部人材を入れることができるというメリットがある。ちなみに、本県は小学校内に幼稚園を設置している例が多く、他県と比べ、幼小連携が取りやすい環境にある。



二つ目は、PTA文化教養部には、以前から読み聞かせボランティア「エイトの会」が結成されており、毎週金曜日に読み聞かせを行っているが、「花植隊」の活動にも参加してもらっている。

三つ目は、今年度結成したばかりのサークルで、図書室運営ボランティア「図書館友の会」である。本校には約1,000名の児童がおり、図書の貸し出しや返却は図書館システム「リーぶる」が導入されており、簡単にバーコードで処理出来るようにしているが、休み時間等に集中してするため、本の整理や修理まで手が回らない状況があった。その解決のため、子ども達の本の貸し出しや返却の際の手伝いや本の整理、本の修理等の活動をしている。

四つ目の「マルつけ隊」も、現在取り組んでいる最中であるが、遅れた児童の支援として、お昼休みに家庭学習の丸つけをする。

五つ目は、今年からアルミ缶やプルタブのリサイクルに取り組んでいるが、次年度からは「母親委員会」として、ベルマーク等の回収にも取り組んでいきたい。

以上、PTAのボランティアサークルを活性化させ、スクールガードとして活用したいと考えて

いる。これは、P T A活動の活性化が、スクールガードの機能も兼ねることになり、一石二鳥である。

## 9. おわりに

これまで、本校の、学校と家庭・地域、関係機関との連携の取り組みについて、いくつかの事例について紹介してきたが、その多くが少しずつではあるが成果を出しつつある。その意味からも、本校の取り組み方法については、大成功とまではいかないまでも、決して失敗はしていないといえるであろう。

そこで、何が上手くいったのか、何が上手くいかなかったのか省察を加えると、学校の組織体制の構築や関係機関・市民団体との協力関係を結ぶまで、あるいはP T Aボランティアサークル結成までのプロセスやアプローチに、“成功”するか“失敗”するかの鍵が隠されていると考える。つまり、連携・協力が“成功”するとは、学校や家庭・地域、関係機関が“連携・協力”を図る場合に、そのプロセスにおいて双方の目標を一致させ、共同意識を育てることが大切であると考え。また、双方の課題解決に繋がったということ、お互いに“メリット”があったということが、“成功”というゴールだということである。

具体的には、本校の、これまでの学社融合の取り組みは、目的論からすると、子ども達の健全育成という意味で必然性があり、地域の安全・防犯対策の構築という視点からも緊急性があった。方法論からすると、そのケースに応じて連携・協力する機関や団体を選択し、可能な範囲での連携・協力を進めていくということである。全て投げるのではなく、あくまでも学校は学校として、出来る限りの対応をしていくということ、つまり、目標をスモールステップで、かつ解決を急ぎ過ぎないというスタンスが大切なのである。

連携・協力する機関・団体についても、実は様々な関係機関の特性（目的や専門）があったり、N P Oなど、様々なネット・ワークが立ち上がっているが、なかなか情報が入ってこないために、連携・協力が図れないことが多かったりする。そのためには、絶えず情報連携を進めながら、ネットワークを広げていくことが、児童の抱える多様な問題解決への足がかりに繋がると考える。

## <註>

\* 1 現在、社会的なレベルで“学社融合社会”を目指し、様々な取り組みが進められているが、学校の組織体制や関係機関・市民団体の機能あるいは社会的な立場、また、それに当てられる時間や人員等によって、プロジェクトチームの方向性あるいは目的（メリットやデメリット）、その形態や手段は千差万別に変化することから、まだまだ“学社融合”とまでは進んでいないように感じている。また、この“融合”という言葉のニュアンスからは、“連携”から更に進んだ最終形態のようなイメージを聞く側に持たせてしまう。しかし、それら全てをふまえた上で、スローガンとしては一つに統一した方が、より実効性があるという論者の思いから、表記的には“学社融合”という言葉を使っていきたいと考えている。

\* 2 <http://www.ginowan-okn.ed.jp/~hpkakazu-e/index.html>

\* 3 ラインズキャンパス「ラインズキャンパス」

\* 4 キュート連絡網「スズキ教育ソフト」